

メガアワビ資源再生のための 初期生態の解明に関する研究

(予算区分 県単 研究期間 平成26～28年度)

担当：水産技術研究所伊豆分場 伊藤

【研究の背景とねらい】

伊豆半島沿岸では、アワビは単価が高く、磯根漁業の重要種となっています。稚貝の放流をしているにもかかわらず、アワビの漁獲量は平成4年以前の平均62トンに対し、近年では30トン未満にまで低迷しており、抜本的な資源回復対策が望まれています。

そこで、本研究では、メガアワビの稚貝期の生態を明らかにすることで、稚貝期の生残を高めるための天然稚貝場の造成方法や維持管理方法を確立し、放流方法の適正化を図ることを目的とします。

【これまでに得られた成果】

- ・稚貝の着底条件を明らかにするため、着底間近のベリジャー幼生を海域に放流した結果、放流場所の石に着底して、周囲には逸散しなかったことが確認できました。また、カジメ群落内に初期稚貝が着底することが確認できました。
- ・稚貝の生残条件を明らかにするため、着底半年後の稚貝の生息密度とそれぞれの環境要因との関係を調べた結果、大型海藻であるカジメの被度が80%以上の場所(図1)や水深4～10mの場所(図2)、トコブシ稚貝の生息密度が高い場所でアワビ稚貝の生息密度が高いことが分かりました。

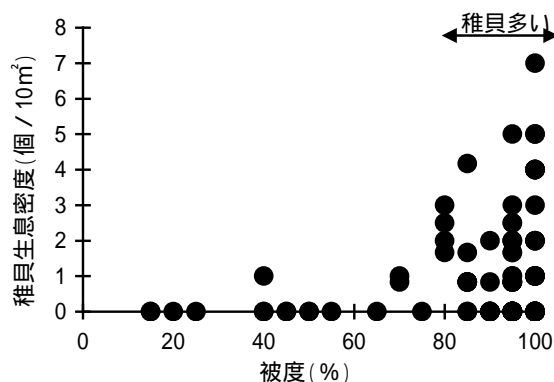


図1 稚貝生息密度と大型海藻の被度の関係

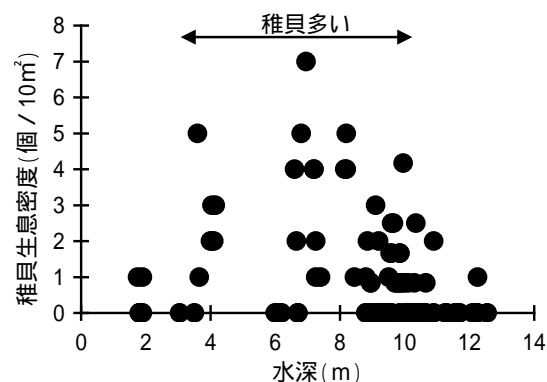


図2 稚貝生息密度と水深の関係

【期待される効果】

- ・稚貝場の好適条件が明らかになり、天然稚貝が自然加入しやすい稚貝場の造成方法の指針を策定し、稚貝場の維持管理方法を確立し、資源を増加させることが期待できます。
- ・適正な放流場所を明らかになり、アワビ資源を効率良く増加させることが期待できます。

【今後の計画】

着底条件については、無節サンゴモやアワビ生息状況との関係を、生残条件については、転石の数や大きさ、波浪との関係を中心に調査を行います。

(作成 平成27年4月1日)

アワビベリジャー幼生の無節サンゴモ等への着底状況や、その後の転石での生息状況を転

(試験研究課題年次別解説集様式 2 号：継続課題用)

石の数や大きさ、波浪との関係を調査し、稚貝の生残条件を明らかにしていきます。